

## 『破戒』論：〈種々なる生活状態〉の形象について

瓜生, 清  
九州大学大学院修士課程

<https://doi.org/10.15017/12157>

---

出版情報：語文研究. 36, pp.43-55, 1974-02-28. 九州大学国語国文学会  
バージョン：  
権利関係：

# 『破戒』論

## 〈種々なる生活状態〉の形象について

瓜生 清

### (一)

すでに「破戒」についての論述は夥しい数にのぼる。「破戒」が自然主義文学の成立の根幹に深くかわる作品であった以上論義の喧しきは当然の現象であった。そして、現在まで様々な「破戒」論が、真の作品像の定立とその歴史的位置付けとに及ぶ重要な問題にアプローチしている。早く同時代評の多くを涉猟し、「破戒」の本質を闡明せんとした本格的力作である平野謙氏の論を始めとして枚挙に遑が無い。ここで私は、先行の研究を参照しながら、「破戒」についての試論を提出したい。

「破戒」を論評した同時代の評論については、平野謙・平岡敏夫氏等の詳細な調査がある。ここでは「破戒」評の中、特に小島烏水の「破戒」を読む（『文庫』明治39・5）の考察を手掛りとしながら、「破戒」について私見を述べてみたい。

平野氏の要約によれば、同時代評に共通する傾向は、特徴的なことは、「破戒」生成の二契機を統一的にとらえ

ることにほとんどすべての批評家が失敗している事実である。作者の態度の真率にして清新なこととその題材があまりに特殊的で一般に通用しにくいというのが「破戒」のプラスマイナスを腑わけする主要点であった。

天溪、天弦、孤島、羚羊子、鶉浜生、夢蝶閑人、国男、秋江、あうたう、晶子、楠緒子らはすべて口をそろえて、主人公の苦悶が誇張された特殊な人種的偏見に根ざしたものでゆえ共感しにくい、と難じたのである。

事実「破戒」評の多くは、正宗白鳥の「只吾人は主人公に對する外部の壓迫の甚だ弱きを覚え、少し齒痒し」という例外的な言及を除き、丑松の出自を部落民に求めた悲劇の形象を、素材論的な面で一様に論難している。

このような「破戒」評の大勢は、「破戒」出版と同時に、未曾有の活況を呈した文壇の反響と共に、「破戒」刊行後に発表された藤村の小文・談話の類にまで隠微な影響を及ぼしている。

「山國の新平民」(「新片町より」所収)にもその間の事情が窺える。この感想文は今までの「破戒」論にも引用され、重要な資料となつていたが、この小文は、「破戒」評の過半を占めていた作中の部落民に対する差別と迫害の苛酷さが不自然な誇張をもつて描かれたとする論難への、藤村の側からの反論の意味を持つものである。ここで、

いかに信州が山國だからと言つても、貴様の言ふやうなことはあるまい。あまり誇大に過ぎるといふ人もある。私も東京に居る頃は彼様なことはあるまいと思つて居たのだが、信州に行つて住んで見て解つた。

と述べて、実際の見聞を中心にした記述の体裁をとり、信州の部落民の置かれてゐる現状をありのままに報告することで、「破戒」評に答えている。続けて

今だに士族は士族、町人は町人、百姓は百姓と、階級差別の思想の脱けない山國の人が、同格に新平民を見るといふ時機は遠い將來のことだらうと思ふ。

と述べて、最後に繰り返すように「彼様いふ風の事はなからうと云ふ考を有つた人もあらうが、實際あり得る事を書いた積りなのである。」と反論している所から、この感想を「破戒」と関連付けて考える場合、自著に対する論評をどのように受けとめていたかについて考えておく必要がある。この小文「山國の新平民」は、初出時の表題では「破戒」の著者が見たる山國の新平民」(「文庫」明治39・6)であつたことも、「破戒」評が、題材の特殊性又は部落民迫害を不自然な誇張と退けたことへの、実際の見聞を踏まえた反論であつた証拠になるだらう。

これは、「破戒」出版後、空前絶後とも称して過言でない「破戒」評への応接に暇のなかつた時期の藤村の発言であつて、同時代の批評が作品の主題・モチーフの検討を試みながらも、かなり作品の真のテーマから逸脱した、素材論的な方面の否定的取沙汰であつたことへの藤村の反証であつたと考えられる。「破戒」論評への不満は、後年「眠醒めたものの悲しみ」にも継続して語られてゐる。

このように藤村の反論が、丑松の出自を部落民に設定した動機を披瀝していることは重視される現象で、「破戒」刊行後の前述の小文は、一面「破戒」評への反論であつた性格上、作品の主題を遺憾なく示唆する資料とも見做し難い側面を併わせ持つてゐると考えられる。

一方、以後の「破戒」に關した回想文を調べると、後年の回想になるほど、様々な角度からの自由な発言がみられることは注意すべきであらう。

上述した「破戒」評の大半を占める非難は、私見によれば、同時代の評家からは、部落民に対する差別問題を含めて、丑松の自意識上の苦悶に焦点を合わせすぎたため、藤村の意図が正確に把握されなかつたための事態であると考へる。藤村は、こうした題材を作品化しようとしてた時、局部的現象を越えた普遍的問題として主題を把んでいたと考へるべきだらう。

「破戒」は、確実に藤村の充分な配慮と成算のもとに着手され、私は人間の解放といふことに、その訴へに自分の觀察、自分の精力の及ぶ限りをあの作に集中させ様と努めた。(「融和問題と文藝」『融和時報』昭和3・1)はずである。

この書は二年間の文学的労作より得たる新しき收穫なり●  
「書中写すところは種々なる生活状態に触れて光景多様なり  
と雖も要するに鬱勃たる新興の精神を以て全篇を貫きたり●  
新裁まさに成らんとす請ふ清説を賜へ（『新小説』明治39・  
3）

あの作の主人公が、どうして父の固い戒を破る様になつて  
行つたか、といふことが私の書かうとした主なる意圖であ  
つた。だから、作の背景としてはいろいろの人物や、いろ  
／＼の出来事も寫してあるが、作者としての私が讀んで貰  
ひたいと思ふのは、その父と子の關係なのである。ただ私  
はあの作に確實性を與へたいと思ふがためにあの主人公を  
種々の位置に立たせ、或は山國の屠牛場へも連れて行き、  
或は秋の收穫の爲に激しく働く土地の人達の中へも連れて  
ゆくといふ風に描いたのであるから、或は地方色の描寫が  
勝過ぎる様な感じが少くなくからうと思ふのであるが、私の  
本意とする處は、それによつて主人公の意義が深められて  
ゆくといふ點にあつたのである。

前文は藤村自筆と推定される広告文。瀬沼茂樹氏の指摘による。  
後文は前掲の「融和問題と文藝」の一節。註遙か後年の回想資料  
ではあるが、「融和問題と文藝」の一節から見るかぎり、「破  
戒」の基本的テーマが「あの作の主人公が、どうして父の固い  
戒を破る様になつて行つたか、といふことが私の書かうとした  
主なる意圖であつた。」ことと、前掲の「破戒」広告文の「書中  
写すところは種々なる生活状態に触れて光景多様」な作品の性

格が「それによつて主人公の意義が深められてゆくといふ點  
にあつたのである。」との結論へ導かれている点に注目せざるを  
得ない。とすれば、そもそも作中の「種々なる生活状態」の形  
象が、部落出身の丑松の苦悩を小説の基軸に据えたこととどの  
ように絡み合っていたかについて検討することなくして、正確  
な「破戒」像の解明はできないだろう。

以上の観点から同時代評を一瞥すると、早く平野謙氏が注目  
されていた前述の小島烏水の「破戒」評が大きくクローズアッ  
プされてくる。以下その一節を引用しておく。註

「破戒」から猪子蓮太郎や、瀬川丑松や、お志保を假に除  
いたとしても、未だこれで空虚にはならない、依然として  
無爲單純なる山村生活と、醫習と新思想との衝突と不公平  
なる人間階級の軋轢とは、大立物のない舞臺でも、端役で  
活動してゐる。

取り分け感心したのは、村民生活、状態の活寫である。坊  
主の説教から、物價から、居酒屋、牧場の番小屋、田舎の  
お寺、農人の耕耘に至るまでこれが本書全體の地を作つて  
ゐる。

この烏水の理解は、「破戒」の中の「種々なる生活状態」の形  
象の意味について、極て鋭い把握を示している点で、同時代評  
を擯んでた出色の位置を占めるものである。そしてこの烏水の  
評は、田山花袋が明治37年1月小諸の藤村を訪問した折のこと  
を綴つた紀行文「雪の信濃」（『太陽』明治37・12）を引きな  
がら、信州の山間の生活相へ注目していた藤村の動向を逸早く  
察した指摘でもあつた。この花袋の紀行は、紀行文集「草枕」

(明治38・7)に収録されて刊行をみ、後に、藤村の短篇集「緑葉集」(明治40・1)の巻末に「山上のおもいで」(「雪の信濃」より)として付されたもので、「緑葉集」の刊行によって広く流布する以前に、「破戒」と関連付けてこの紀行文をとらえた点で注目値する。因に、花袋の「雪の信濃」の記述によれば、

友は其例としてさまざまな事を語りぬ。この町より西北、浅間群山の裡、珍らしき特色を有したる物語少なからず。

ことに、山番の生活は最も深く興を惹きて、早晚一作品たるの時あるべしといひぬ。

とあり、藤村が「山番」の生活に深い興趣を寄せていたことと、その生活にヒントを得た小説の構想が具体化しつつあったように読みとれる。又「千曲川のスケッチ」に、この「山番」の生活がリアルに活写されていたこともこうした推測の余地を可能にさせるのだが、ともかく「炭焼、山番、それから斯の牛飼の生活」(「破戒」第7章5)の中でも、牧場の「荒くれた山住の光景」(同上)が、「破戒」の意図の一翼を担う「種々なる生活状態」の一設定であったことは疑えない。

上述の烏水評を踏まえれば、「破戒」の舞台が平凡な山間の人間生活の場に仰がれたことについて、「この作の前半が示すような田園文学的要素が滲み込んで来て作者の意図を曖昧にして行った」とする見解にも疑問の余地があり、作中の部落民間題も、信州の山間に生きる人間の生の実相へ向けられた主体的な考察において、「種々なる生活状態」の探求に沿って、素材的にモチーフの必然性が託されていたと考えるべきであろう。

## (二)

〈信州第一の佛教の地、古代を眼前に見るやうな小都會〉(第1章1)である飯山の小学校へ赴任してきた時、丑松の中ではすでに青春の観念から現実への移行が心理形態として完了していた。小学校に奉職する一青年としての確たる教師生活が現実の事態に直面させる。丑松には、今でも寄宿舎時代の「同窓の記憶はいつまでも若く青々として居る」(第3章1)が、この世の中に出される前の空想と夢の多感な青春を過ぎた師範校時代、現実の大きな力に身を晒すことを猶予されていた時期は終りを告げていた。同宿の大日向が「残酷な待遇と恥辱とをうけて、黙つて昇がれて行く」(第1章3)のを見た時、丑松は「大日向の運命は總てすべての穢多の運命である」(同上)慄然たる再認識を迫られている。そして「世に出て身を立てる」(同上)には「身の素性を隠すより外に無い」(同上)と自覚する。

一方、部落出身の「新しい思想家でもあり戦士でもある猪子蓮太郎」(第1章4)の思想——今の世の下層社會の「新しい苦痛」(同上)を通じて丑松は目を開かれて行く。「無理が通れば道理が引込むといふ斯世の中に、誰が穢多の子の放逐を不當だと言ふものがあらう」(同上)このような差別と迫害とにさらされる部落民の悲惨な実状を黙認する現実に対して、蓮太郎の憤激の情が、丑松への感化として「自分等ばかり其様に輕蔑される道理が無い、といふ烈しい意氣込を持つやうになつた」(同上)

「破戒」の幕が切つて落されるのが、晩秋の収穫時、一年の勞苦の全てを癒してくれる実りの時節の生産と活気の中で始まり、小説内の時間が丑松の悲痛な告白によつて厳しい冬の季節の訪れと同時に終りを告げるのは、極めて意味深い設定である。

郊外は収穫の爲に忙しい時節であつた。農夫の群はいづれも小屋を出て、午後の勞働に従事して居た。田の面の稲は最早悉皆刈り乾して、すでに麥さへ蒔付けたところもあつた。一年の骨折の報酬を収めるのは今である。雪の來ない内に早く。斯うして千曲川の下流に添ふ一面の平野は、宛然、戦場の光景であつた。(第4章1)

この秋の田野で繰り広げられる収穫の場に丑松を立ち会わせたことには、現実的な生計の場への解放的な視点が窺え、それが漸次へ重く深く閉塞つた雪雲(第12章3)の苛酷な冬の世界に収斂して行く過程は、丑松の心理の方向が現実から内なる心理へと閉塞して行く行路を浮彫りにするものである。

上述のような作品の構造に関する視点を明記しておき、先ずは、風間敬之進一家の叙述が、「破戒」の中でいかなる形象の意味を与えられているかに注目してみたい。

丑松と敬之進との關係については、野間宏氏の指摘がある。<sup>註12</sup> 丑松がこの風間敬之進に親しみを感じるのは、彼がただお志保の父であるという理由からだけでなく、同じ時代の犠牲者としての近親感がひとり二人をつらぬくからなのである。

即ち、早くは第2章3で、敬之進が退職後の恩給給付を願ひ出る件に、(「時世の爲に置去にされた、老朽な小學教員」(第

2章3)敬之進が、給付資格に半年満たないことに固執する郡視學によつてその哀訴を無下に一蹴されるのを聞いて、(「首を垂れ乍ら少許慄へて居る敬之進を見ると、丑松は哀憐の心を起さずに居られなかつた」)(同上)のである。又、丑松が蓮華寺へ転宿する途中で敬之進と出会い、敬之進が蓮華寺の山門まで同道して(「何故我輩が門前迄送つて行くのか、其は君には解るまい」)(第2章6)と告げる箇所も、家庭の零落と経済上の逼迫から今は蓮華寺の養女となつて居る敬之進の娘お志保が、丑松の意中で思慕の対象となる以前に、丑松の憐みの情が直接敬之進の逆境へ深く注がれている証左になる。

このように作者は周到に丑松と敬之進の親交の様の叙述を進めながら、前掲第4章1の収穫のシーンに丑松を登場させる。〈穢多としての悲しい自覺〉(第1章4)を新にしつつあつた丑松が(「何處へ行くといふ目的も無しに歩いた」)(第4章1)結果、この格別目的のない外出が、丑松を敬之進一家が田野で収穫作業に動んでいる場面へ連れ出しているのは頗る意図的である。丑松と敬之進一家の關係は、後半第17章3で敬之進の家の年貢の場面に丑松を立ち会わせる件での叙述でも重い意味を担つており、丑松と敬之進一家が接近する形象の意味を深く問わねばならぬことを暗示する。

それとは知らず(「丑松は斯の勞働の光景を眺めて居」)(第4章1)だが、

圖らず丑松は敬之進の家族を見たのである。彼の可憐な小年も、お志保も、細君の眞實の子では無いといふことが解つた。夫の食を養ふといふ心から、斯うして細君が勞苦し

て居るといふことも解つた。五人の子の重荷と、不幸な夫の境遇とは、細君の心を怒り易く感じ易くさせたといふことも解つた。斯う解つて見ると、猶々丑松は敬之進を憐むといふ心を起したのである。(第4章2)

この丑松の目撃について「圖らず」の語を補足せねばならなかつたのは、丑松が敬之進に寄せる同情を下敷きしながら、この出会いを意外な驚きをもってとらえようとする意図があり、又、敬之進一家の目撃が、プロットの進行からみても偶発的に穩當を欠くことへの糊塗の措辞ともとれる。それだけこの両者を一体化させようとする作意があらわに感取される。そしてこの收穫の目をにした丑松には、次のような自覚が導かれる。

今はすこし勇氣を回復した。明に見、明に考へることが出来るやうに成つた。(第4章2)

自分だつて社會の一員だ。自分だつて他と同じやうに生きて居る權利があるのだ。(第4章3)

こうした自覚を齎したのは、清涼な秋の田園が丑松に与えた慰藉の反映ではない。丑松は過剰な心理の不安と煩悶のあまり、追い出されるようにして「圖らず」も收穫時の田野を目にした。それは自然の中で労苦する人々の明らかな目撃であつた。その労苦する人々が敬之進一家であると解つた時、丑松は深い憐みの情とともに「勇氣を回復した」のである。ここには、丑松が貧苦する人々へ寄せる共感を軸に、丑松の目と心を自然の中の労働の渦中へ解放させる視点があることと、零落に突きおとされて行く敬之進一家の惨状と丑松の中の自覚とを交差させ、深い通路をもつてとらえようとする意図があろう。

敬之進一家の收穫場面に続いて、次節4で敬之進と丑松を邂逅させるのは、偶然の連続であつて不自然であり、作者の狙いはあざやかに露呈している。丑松と敬之進の親交は、「お互ひに長く顔は見合せて居ても、斯うして親しくするのは昨今」(第2章6)である。そうした間柄でありながら丑松に向つて「實は、君だから斯様なこと迄も御話するんだが」(第4章5)で始まる敬之進御決まりの口上は、この綿々と尽きない述懐によつて、内輪の家庭の様や、第16章7では、お志保に関する蓮華寺の住職の性行まで打ちあけることによつて読者の抱く唐突な印象を緩和させる補填の語と考へられ、敬之進の述懐は両者の接近を自ざす接点の作用を持つ。この愚痴をこぼさざるを得ない素朴で小心な老教育者の「落魄の畫像其儘の様子」(第4章5)を前にして、丑松は自己の出自を自覚すればするほど、零落と惨苦への恐怖を呼び戻し、敬之進の述懐の重みは丑松の心に根付く。

### (三)

「破戒」に登場する諸人物の相互の連鎖については、十川信介氏の犀利な指摘がある。

作中で丑松がいだくかげりはもつとも深いが、それは、彼を中心として放射状に位置する各人物たちの陰影が、彼の心中で次々に重ねあわされて行くからにはかならない。逆に言えば、登場人物は、ほとんどすべての場合、丑松とのみ関係を結び、外から圧力を加え、あるいは内面から彼をゆきぶり、彼を破戒に追い込んで行くのである。

この指摘により、作中の「種々なる生活状態」がいかなる機能をはたす形象であるかは、ほぼ歴然としている。

蓮華寺の住職の破戒行為については、（丑松の破戒と対照的な姿を持つこの破戒は、前者を明らかに照らし出し、「社会」のしくみを裏側から暴露するために必要であった。）のである。

この指摘の妥当性は、（昔風の宗教と信仰との土地）（第15章3）である飯山の人々の間に、強固な地盤を持つ寺院に対する作者の見方からも推察される。住職の説教の場で披瀝された作者の宗教観の一端は、

有體ありていに言へば、住職の説教はもう古い、古い遣方で、明治生れの人間の耳には寧ろ異様に響くのである。型に入った假白かりまのやうな言廻し、秩序の無い断片的な思想、金色に光り輝く佛壇の背景——丁度それは時代な劇でも観て居るかのやうな感想を與へる。（第15章4）

に如実に窺える。このような形骸化した宗教の実体を背景にして、（蓮華寺の内部の光景）（第17章5）が、その学識履歴からして畏敬されている住職が（袈裟を着て教を説く身分）（第16章7）で人々に人間と生れた宿世のありがたさを論しながら、養女お志保に不義を仕掛けることで真相を明らかにする。この住職の僧侶にあるまじき行為は、社会の構成単位である「種々なる生活状態」の内幕を剔抉してみせ、皮相な社会関係の構造そのものを相対化する意図の具体化と考えられる。因みに、第17章7で住職の妻君に、

成程——今日飯山あたりの御寺様で、女狂ひを爲ないやうなものには有やしません。ですけれど、茶屋女を相手に爲る

とか、妾狂ひを爲るとか言へば、またそこにも有る。

と嘆かしている件は、腐敗と墮落に満ちた寺院社会の裏面を示し、そうした精舎の暗黒面の延長上にこの住職の不義は提出されている。上述の妻君の述懐は、醜行の発生自体が蓋然性を持つ寺院の汚濁しきった姿をつきつけ、住職の破戒行為によって寺院を第一とする社会において形成されてきた価値体系を切り下げ相対化している。

一方、丑松の奉職する小学校を中心に教育界の暗面は、（教育者の龜鑑）（第2章2）として表彰された校長の「教育事業」（同上）が、

教育は則ち規則であるのだ。郡視學の命令は上官の命令であるのだ。もと／＼軍隊風に児童を熏陶したいと言ふのが斯人の主義で、日々の舉動も生活も凡て其から割出してあつた。（第2章1）

という規則第一主義のアナクロニズムな在り方へ、揶揄と批判が込められていることから自明である。冒頭近く第2章6に、功労者として表彰された校長の祝賀会が催され、（盛な歡樂の聲）を蓮華寺へ転宿する途中の丑松と敬之進の耳に留めさせ二人の心に一層の不愉快と寂寥さびしさとを添へさせる。この祝賀会の場面の描写が、老朽な教育者の末路を象徴する敬之進と形式主義一辺倒でへ地方に入つて教育に従事するもの、第一の要件は——外でもない、斯校長のやうな凡俗な心づかひ（第2章1）によつて、教育の実権を拡大私物化して行く情実によつて結びついた人間群とのコントラストを狙つたものであることも自明である。自嘲と自棄に老骨を嘆く酔漢敬之進と前途への不



安を強く抱き始めた丑松が目撃させられた三浦屋での祝賀の意味は重い。そして、校長が町会議員と結託して丑松追放の密議を進めている件で、普通教育の場の最高責任者の姿勢が、丑松の進退について〈學問の上には階級の差別も御座ますまい。そこがそれ、迷信の深い土地柄で。左様いふ美しい思想を持つた人は鮮少いものですから〉(第21章5)と裁定する頑迷固陋な町会議員のレベルと吻合していたことを書き入れた時、皮相な生活の外形を剥ぎ取って、事物の核心に肉迫してみせようとする作家の姿勢は、描写を越えて世の中の実体認識が裸形のまま提出に近づいている点で最も鋭く窺える。言うまでもなく、全てこうした事例は、〈今日の教育界は心ある青年の踏み留まるべきところでは無い〉(第11章13)という結論を引き出すためのものであった。

以上、一貫した〈種々なる生活状態〉の内実提起が、〈酷烈しい、犯し難い社會の威力〉(第15章1)の指示となつて、丑松の苦悩を引き出す根源的な力の所在が奈辺にあるかを明らかにし、丑松の自意識の過剰な跳梁による觀念劇に墮すのを内部から補完する役割を持っていた。

社会の実体を内部から告発する方向と、部落民への差別と迫害を許容している社会の実状を把握することの相互の関連について、作者の認識の程は判然としない面があるが、ともかくも、丑松の身に迫る差別と迫害が、上述の寺院生活、教育界等の所謂〈恐しい世の中〉(第12章2)の実体暴露によつて、相互に脈絡をもつものとして把握されていることから、単にへ「告白」に重点があるのであって、「部落民」はそれを重からしめるた

めの方法として使われている。と断定できない部落民の差別の現状に題材を得た積極的意図があつたのである。

#### (四)

丑松の心理の推移に目を向けると、〈穢多としての悲しい自覺〉(第3章6)〈穢多としての切ない自覺〉(第2章6)等これに類した表現は、零落や出目の露頭への恐怖の想念にからまって散見するが、この悲痛な自覚が、続いて楽しかった幼少年時代、〈師範校で勉強した時代〉(第4章2)への否応のない心情的傾斜を見せて行く。世の中の現実に直面しない、その仕組みと力に無頓着な自由な世界への切ない懐旧となっているのは見逃せない。丑松は世の中の実体を知ることからくる恐怖によつて、かつての社会外の世界へ未だ世の中を其程深く思ひ知らなかつた頃〉(第5章1)へ盲目的に自己を埋没させようとする。

こうした丑松の心情の一齣としてある、第9章1の幼なじみのお妻との邂逅は、従来論者が一様に、抒情詩「初恋」で周知の藤村の自伝的側面を語るものとして重視している箇所だが、この抒情的な甘美な場面は、〈楽しい追懐の情〉(第9章1)の中で蘇る往時の体験が、今や過去のものとして記憶の中に封じ込められてしまった痛切な認識を呼び起こすための挿話ではない。

作者はすでに伏線として、愚痴と自嘲まじりに過去の思い出をあざやかに描いてみせる敬之進の述懐が、お妻との挿話に見られる丑松の心理の構造と同質のものであることを提出してい

た。

我輩の家の樂な時代——中略——一生のうちで一番樂しかつた時代を思出さずには居られない。一盃やると、きつと其時代のことを思出すのが我輩の癖で——だつて君、年を取れば、思出すより外に歡樂が無いのなもの。(第4章5)ここでは、敬之進にとつて過去への追想が、丑松の心情と全く相似形で生きている。敬之進が現在の零落困窮に(馬車馬の末路)(第4章4)を自覚するだけ、過去への退嬰的な追懐があざやかな一瞬を形づくることになる。現在の(落魄の生涯)(第5章1)は、意識を全て過去の追憶の中へのみ向け、そこに封じ込めようとするか、酒の酔を借りて現実の惨苦を逃避するしかない。

かつての無邪気なお妻との初恋が、時の経過によつて記憶の中にしか意味をもたなくなつたことへの痛き認識の描写は、取りも直さず(丑松の身に取つては一生の變遷)(第7章1)、(自他の變遷)(第9章1)を強く意識させるための意図的手法なのである。そして(僅かに九歳の昔、まだ夢のやうなお伽話の時代)(第9章1)のあどけない世界が、(空想を誘ふやうな飴屋の笛)(同上)の音で始まるのは、苦惱からの丑松の心理の退行現象であることを示し、そこから導かれるのは、自我の安息ではなく、現在の自己の境遇へ反響して嗟嘆に移行するための、今となつては余りに稚純すぎる過去の物語でしかない。このお妻に関する挿話は、作者の伝記的事実との合致を抜きに作中での形象の意味を探れば、(斯ういふ追懐の情は——中略——終には、あの蓮華寺のお志保のことまでも思ひやつた。)

(第9章1)とある通り、お志保へ寄せる丑松の意識の明確化の契機としてあつたのである。

社会の機構の中で自我の充足と拡大を志向する(師とも頼み恩人とも思ふ)(第14章4)蓮太郎と、社会内の体制に密着して自己の生を確保せよと命ずる(父の精神)(第7章6)との両極に丑松は引き裂かれる。蓮太郎から受ける新しい感化と父の固い戒との挾撃。この二つのファクターが丑松を苦悩に導く。丑松の鬱屈した自我を現実的に開放し充足するはずの蓮太郎との出会いは、新しい自我の覚醒をもたらすと共に、親しく蓮太郎に親炙しながら、自己の出自を秘していることを(どうしても言はないのは虚偽)(第9章4)であるとする自責によつて、自己の良心に照して自分の素性を隠蔽していることへの(鋭い良心の詰責)(第16章4)からくる自己欺瞞への糾弾へ——(身を衛る餘儀なきの辯解)(同上)と良心との葛藤へ、換言すれば、自己の心理上の正邪の煩悶に収束し自閉して行くのは注意すべきである。すでに蒲生芳郎氏の指摘があるように、丑松には、我れは穢多なりの書き出して始まる「懺悔録」の感銘のみが大きくなり、蓮太郎が(心血と精力とを注ぎ盡したといふ「現代の思潮と下層社会」(第16章3)等の他の著述の思想とその具体化であつた対社会的な実践が、丑松の意識から漸次顧みられなくなる。(戦士)である蓮太郎からの感化は、丑松を即座に自立へ更生させず、その懊惱が蓮太郎の壮烈で悲惨な横死で終着をみることに、蓮太郎受容の方向を示唆する。ところで、蓮太郎と父が丑松にもたらした自我の分裂感は、

前述のお妻との邂逅が丑松に与えた心理の反響において殆んど同一である。それは穢多であることを自覚するための悲痛な絶望感とお志保への思慕に託される「愛といふ楽しい思想」(第9章1)への分裂である。このように丑松の苦しみは、現世的な「愛と名」(第19章3)への渴望と、それが現実には絶たれずにはおかない出自の自覚からくる煩悶であることは明記しておきたい。

丑松は——中略——年貢の準備に多忙しい人々の光景を眺め入つて居た。いづぞや郊外で細君や音作夫婦が秋の収穫に従事したことは、まだ丑松の眼にあり／＼残つて居る。斯の庭に盛上げた粃の小山は、實に一年の勞働の報酬なので、今その大部分を割いて高い地代を拂はうとするのであつた。(第17章3)

これは、第4章1でみた敬之進一家の秋の収穫が、初冬の「高地代」に置換された印象深い一節である。この場面については、越智治雄氏の鋭い分析がある。前述の敬之進一家の収穫の場面が、「一年の勞働の報酬」である生産と活気に溢れて、自然への解放を内に秘めていたことについてはすでに述べた。この年貢の場面では、晩秋の田圃の牧歌が、丑松の目前で演じられる苛酷な小作人敬之進一家の境涯への目撃に転じている。そして収穫の意味をも、地主と小作人との冷酷な社会経済関係から生れる「斯の屋根の下の貧苦と零落」(第17章2)への必然の帰結として描いていることについては、丑松が第4章の収穫とこの年貢の場に、それぞれ立ち会うことから見て重視すべき

であろう。そして、年貢を納める妻君の投げ遣りな自棄の姿を書きとめた時、極貧そのものへ転落して行き「我輩の家庭なぞは離散するより外に最早方法が無くなつて了つた」(第16章6)惨めな敬之進一家に向ける視点が、作者の中で揺ぐことなく保持された事を語る。だが秋の牧歌が初冬の年貢に転じた時、丑松には、その重い零落の実体を前にして、かつての自然への解放感消失して了つている。そこには重苦しい零落の酸鼻だけが残っている。

斯の光景を眺めて居た丑松は、可憐な小作人の境涯を思ひやつて、——中略——なか／＼細君の脣腕で斯の家族が養ひきれぬものではないといふことを感じた。お志保が苦しいから歸りたいと言つたところで、「第一、八人の親子が奈何して食へよう」と敬之進も酒の上で泣いた。噫、實に左様だ。奈何して斯様なところへ歸つて來られよう。

丑松は想像して慄へたのである。(第17章4)

極貧にあえぐ敬之進一家の惨状を、この年貢の場面をつぶさに見た丑松は、お志保が養夫である蓮華寺の住職の醜悪な振舞のため、義理と恩義のある養家を出て実家へ帰りたいと敬之進に愁訴したことを考え合せて慄然としたのである。ここでは、丑松が身に迫る圧迫で「喪心した人」(第13章3)のようになつた絶望的な心理と敬之進一家の生活は、その暗さにおいて等価なのである。おそらく作者は、この年貢のシーンを書きとめた時、生活の中での自我充足の可能性が、極めて困難な世の中の実体を測っていたのであろう。

このような救いようのない暗さは、すぐさま次章の叙述に受

け継がれる。

毎年降る大雪が到頭やつて来た。町々の人家も往來もすべ  
て白く埋没れて了つた。昨夜一晚のうちに四尺餘も降積る  
といふ勢で、急に飯山は北國の冬らしい光景と變つたので  
ある。(第18章1)

季節の推移は、丑松の心理の暗澹さに比例して、適確に漸層法  
的に暗鬱な冬景色に閉ざされる。

ここへ突然蓮太郎の死が訪れる。この先輩の悲惨な最後を前  
にして丑松は自己省察を試みる。そして蓮太郎の「男らしい生  
涯」(第20章4)を反芻しながら、自己の姿を「隠蔽さうく」  
として、持つて生れた自然の性質を鎖磨して居(同上)たへ  
「虚偽の生涯」(同上)と気付く。ここで「男らしく社會に告白  
(同上)することを蓮太郎の死が教えたのである。

しかし、蓮太郎の「壯なる思想」(同上)の内実を保証して  
いた対社会的な実践の主体性は、丑松がこの自己更生の決意を  
抱んだ時、変質して丑松自身の心理上の自己欺瞞への糾弾に転  
換していることと、「種々なる生活状態」の中でも、生活の次  
元において最も生彩ある把握を提示してきた敬之進一家の零落  
の積極的形象が放棄され、丑松の苦悩に素朴な同情と共感を寄  
せるお志保との間に自我の通路が開けて行くことによつて、丑  
松の煩悶が頗る心理的な軌跡を描いている点で一致している。  
即ち、蓮太郎と父からの挾撃に、新たにお志保への「愛といふ  
楽しい思想」が丑松の心に宿つた時、この三極構造の中で、蓮  
太郎からの新しい人間観の自覚は、丑松の告白による社会内  
の自我の苦しい順応へ結ばれた。言いかえれば、この自覚が対

社会への告白による自己救済の願ひに変貌して行く時、前に詳  
述した敬之進一家の零落の意味の繼承において積極性を失ひ、  
閉塞した過剰な觀念からの自己救出に比重が移つた結果、作品  
の構造の屈折を必然とすることになる。敷衍すれば、敬之進一  
家の貧苦と零落は、お志保へ寄せる丑松の恋情を起点にして、  
急速に生活の次元で内に秘めていた解放の視点を喪失した。終  
章近く「貧苦の爲に離散した敬之進の家族の光景」(第22章1)  
は、それに至るまで、退職間際のあわれな老朽教師敬之進の登  
場から、次第に零落へ突き落されて行く惨苦の過程で、「種々  
なる生活状態」の挿話の中でも持続して語りつがれたが、その  
零落の意味の終幕である。

瀬川君のも苦しい境遇だが、貴方のも苦しい境遇だ。畢竟  
貴方が其程苦しい目に御逢ひなすつたから、それで瀬川君  
の爲にも哭いて下さるといふものでせう。(第22章3)

このように同僚の銀之助をして語らしめた、お志保から差し伸  
べられた共感によつて、丑松の苦悩と深く交差していた敬之進  
一家の零落の意味が完成した。

こうした丑松とお志保の同化は、終章近くに至つて、お志保  
の風貌が急激に変容を遂げて行く唐突さとなつてあらわれ、そ  
の変貌がプロットの破綻を呼んだ。すでにお志保の急速な変貌  
がリアリティの欠如を来していたことについては、同時代評の  
中、楠緒子が的確に指摘していた。<sup>註18</sup>

そして、敬之進一家の零落の意味の積極的繼承が断念され、  
むしろそれは、無慈悲で残酷な世の中の実体の重さを改めて測  
定する提示となつている。零落の意味の繼承が変化したことに

より、作品の構造は鬱屈した自我の更生を、告白による社会内への苦しい自我の順応に求められて行くことになる。

「破戒」は、後半に著しい告白による自己更生のモチーフにより、蓮太郎・敬之進一家の継承に絆がはめられてくることについては前に見てきた通りである。蓮太郎の思想と実践を前にして、丑松の心理は、先輩蓮太郎に対して自己の出自を隠蔽していることの正邪の観念による煩悶である。蓮太郎の悲惨な死も、丑松の苦悩のリアリティ測定を目盛りであるへ到底誤解されずに済む世の中では無い（第21章6）その重い実体を担う形象に転じていた。敬之進一家に見た生活の次元での自立の可能性は、第17章3の年貢の場面であざやかにとらえられていたように、自己の苦悩の根元である社会の実体の重さを照射する形象に変化して行く。

このような「破戒」の性格は、藤村の社会意識を前近代的な未熟なものであるとし、二義的なものと断ずる立論を成立させる得るが、作中のへ種々なる生活状態の形象から抽出される作家が現実に向ける目、登場人物を背後から操作してみせる作家にあつた社会認識まで抹消できない。へ種々なる生活状態を書き込んで行く作家には、明らかに社会の実体についての把握があつた。問題は、漸次その把握された実体によって、丑松の苦悩のリアリティが内面的に保証されて行く方向での造型に変化したことだろう。

「破戒」を書きました時は結構も始めからチャンときめて置いて、こ、を斯う書き、あすこを斯うと十分に案が立

つて居りました。<sup>註19</sup>  
という回想文を信じるかぎり、構想の屈折は作家の意識に上らなかつたのかもしれない。しかし、上述の種々なる生活状態の形象を考察したかぎり、それが、現実での自我充足が極めて困難な社会の実体に突きあつた時、丑松の苦悩のリアリティを補完する方向への形象に転じたことで、作品の構造にヒズミを来していると考ええる。

最後に、「破戒」についての多くの研究から教示を得たが、とりわけ、越智・十川両氏の論稿に示唆を得ている。記して謝意を表させて頂く。なおテキストは筑摩書房版藤村全集によつた。

### (注)

- 1 平野氏「島崎藤村」（新潮文庫）平岡氏「破戒」私論」（「島崎藤村」日本文学研究資料叢書）所収
- 2 平野氏「島崎藤村」30・31頁
- 3 「破戒」を讀む」『讀光新聞』明治39・4・9）全集別巻66頁
- 4 全集6巻78・83頁
- 5 「讀光新聞」大正・12・4・4）全集9巻249頁
- 6 全集9巻64頁
- 7 へ例の豫告、方々の雑誌に出可申候。「新小説」の分尤もよろしきやに思はれ候。この明治39年9月1日付け神津猛宛書簡を根拠とされる「近代日本文学大系 島崎藤村集1」の解説参照
- 8 全集9巻64頁

- 9 全集別巻87・89頁  
全集2巻546頁
- 10 和田蓮吾氏「『破戒』の史的位置」、『自然主義文学』所収119頁
- 11 岩波文庫版『破戒』解説34頁
- 12 「二つの『破戒』」18頁『文学』昭和47・1
- 13 前掲注13十川氏論文17頁
- 14 前掲注11和田氏論文113頁
- 15 「『破戒』に対する視点の問題」44頁『日本文学』昭和43・4
- 16 「破戒」、『島崎藤村必携』所収106・107頁参照
- 17 「『破戒』を評す」、『早稲田文学』明治39・5 全集別巻68頁参照
- 18 「春」と『龍士會』『趣味』明治40・4 全集6巻503頁
- 19

受贈雑誌 48年7月～12月 ②

- 人文論究(関西学院大) 22巻3・4、23巻1 / 日本文芸研究(関西学院大) 25巻2・3 / 国文学(関西大) 48・49 / 甲南国文(甲南女子大) 20 / 研究紀要(大阪城南女子短大) 8 / 芦屋ゼミ(甲南高校) 1 / 島大國文2 / 広島大学文学部紀要32巻1 / 山口大学文学会誌24 / 山口女子短期大学研究報告27 / 香椎潟(福岡女子大) 19 / 鹿児島大学文科報告9号1分冊 / 万葉82 / 国語学93 / 国立国語研究所年報24 / 国立国語研究所報告47 / 50 / 調点語と調点資料52・53 / 日本学術会議月報14巻6 / 10 / 文献ジャーナル12巻6 / 11 / 逐次刊行物目録46年版 / 金沢文庫研究19巻5 / 8 / 肇国361 / 364 / 白路28巻7 / 12 / 王朝文学史稿2 / 軍記と語り物9 / 能 研究と評論2 / 御伽草子研究1 / 短歌研究27巻12、28巻12 / 古典と近代文学14 / 近代文学研究2 / 近代文学考1 / 海事史研究20 / 文学史研究1 / 善本写真集39・40 / 郷土文化28巻2 / 東子の文学碑II 7